

## 闇夜の漁火

土田龍太郎

夜に入りてなほ舟を出して繩なはたき漁りする海士、鱗うろくづをおびき寄せむとて、舟べりに篝かがりを設けて火を燈すことあり。このわざすでに上つ世に生まれりとおぼしくて、萬葉集の収むる歌に漁火いさりびを詠めるもの一つならず。例へば卷十二に

能登海爾釣爲海部之射去火之

光尔伊往月町香光

(のとのうみにつりするあまのいさりびの

ひかりにいゆけつきまぢがてり)

といへる一首あり。月待ちがてりと結べれど、こは月待ちながらといふにひとし。いまだ隠れて見えぬ月かげの照り出づるを待ちみつ、しばしは海士の焼く漁火の光ばかりをたよりて海を行けかしといへる一首のおもむきすぐに悟るにかたからじ。海士が篝に火を照して漁りするは大方月照らぬうちなれば、その間は心長く月の現るるを待ちながら、ただ漁火をしるべにておのが舟を漕ぎ出づるほかすべなきなり。夜空に月明きときは、篝火のかたに寄り集ふ鱗つとさしも多からず、海士の心にまかせねば、闇夜ならでは漁すなるわざのおのづと怠りがちになりゆきて、漁火を用ふるに月夜を避くることなべての海士の習ひとなるにいたり。

鵜飼をなりはひとせるものはや神代にありしこと、日本紀によりてぞ知らるるなる。

島鳥鵜飼部今援來

(しまどりうかひどもいますけこね)

てふ句もてとぢめたる歌謠一首、神武紀に載りたり。

源氏物語藤裏葉卷をけみするに、未下ひつちるほどまだ明きうちに鵜使ひどもをやとひて、六條院の池にて魚をとらするさまを述ぶるところの見ゆれば、篝火なきままに鵜使ふためしたえてなしとまで云ひがたきはさてもこそあれ、大方は夜に入りてより火を燈しつついなむわざなりとおぼゆれば、鵜使ひの月明りをいとふことほかの漁火の海士といささかも異ならざるがごとし。

さればかの定家卿も、月明りをかこてる鵜飼を歌に詠めりしことあり。

久方の中なる川の鵜飼舟

いかに契りて闇を待つらむ

てふ一首、新古今集夏の部に入りたり。ここにて作者の思ひかくるは、久方の月の中に生ふといふなる大きな桂の木とおぼしければ、川といへるは桂川をさせるなるべし。月にゆかりある桂川に舟出せし鵜飼ども、そもいかなる因みありてや、かへりて月を厭ひ闇を待つぞとあやしみ思ふ意を述べたるなり。

世下りて、たれともわかねども

闇を待つ漁りの海士の月に寝て

なる發句をものせるものあり。人のめでてやまぬ夜空の月も、わがなりはひにはなかなかさはりとなりてうきものなれば、月に照るほどはつれづれにてなすことなし、いたづらにおきゐたらむもはしたなかるべければ、しばらく寝入りて闇を待つにはしかじといへる漁火の海士のせんかたなき心ちわづか十七字の内にのこりなくもれり。

さらに鵜飼といへる謠曲ありて、作者榎並の左衛門五郎なれど、世阿彌の筆を加へしところ少からずといへり。曲中、かつて殺生禁斷を犯せし罪にて柴漬にせられし鵜飼ひの靈の現れて旅僧の前にて鵜を使ふ所作をさながらまねびつつ、漁火の下にて魚とることのこよなき樂みを左のごとくに述べたり。

面白のありさまや、そこにも見ゆる篝火に驚く魚を追ひ回し潜きあげ掬ひあげ隙なく魚を食ふときは、罪も報いも後の世も忘れはてておもしろや、云々

と言へる地謠、末に

不思議やな篝火の燃えても影の暗くなるは、思ひ出でたり、月になりぬる悲しさよ

と謠ひとぢめたり。雲間より月のさし出るにまかせて、その光にけおされて篝火の弱くなりゆくやに見ゆれば、魚の寄り來ることのまれがちになるままに、鵜使ひのわざのえうなくなりもてゆくこといともほいなしといへるが一段の意なるべし。

月なき夜半の漁火に云ひ及ぶは本朝の歌人のみにてもあらず。春夜喜雨と題せる杜甫の五律あれど、その頸聯となれる野徑空俱黑 江船火獨明てふ兩句、月かげ見えぬ雨夜に漁火を點せるさまを言短かに述べたり。また張繼の楓橋夜泊といへる七絶ことに名に立てれば知らぬ人としてはまれなるめれども、月落烏啼霜滿天 江楓漁火對愁眠といへる起句承句、月なき寒き夜に漁火の燃ゆるさまを謳ひて、さながらせまりくるがごとくなれば巧みなることよなし。

海士の漁火を歌に詠めることさまた珍しからねども、かかる歌の良し悪ししかと定めむとせば、海士の篝火を焼きて魚をとるはなべての漁りとは同じからで、もはら月の照らぬ闇夜のいとなみなることに思ひ至さではあるべからず。

今ことに勘へまほしきは、在原業平とおぼしき昔男の詠める一首にて、伊勢物語八十七段に載りたり。草子地さうしぢによるに、この昔男津の國蘆屋の里に知るよししてかしこに宿りけるとき、親しき衛府の佐どもすけを集へて海のほとりをありき山に登りて布引の瀧を見つつ歌詠みなどして日ねもす遊びたり。歸るさにはるかにわが宿の方をながめやりしに、なにやら光れるものありければ

晴るる夜の星か河邊かはべの螢かも

わが住むかたの海人あまのたく火か

てふ一首をものしたり。そまなにものかかなたに光りて見ゆるぞといぶかしみ問へる歌なるにまぎれなけれども、わづか三十一文字の内に、夜の星と螢と漁火を列ぬることさまざま巧みありとも思はれず。

漁火ほたるびと螢火のみにつきて云はむに、同じく闇夜にあやしく光るものにて、いづれやそれとわかちがたきをりさへまれならねば、この兩つばかりを比べむはさらに咎むべきにあらず。かの宇治山の喜撰法師の詠める

木の間より見ゆるは谷の螢かも

漁りに海士の海へ行くかも

てふ一首傳はりたれどめでたきこと言ふはかりなし。およそ螢火と漁火を謳へる詩歌、この一首に優れるものありとしも思はれず。

右に引ける一首の中にて昔男、川べの螢と海士の漁火を並べ云へるまでこそはいともなだらかなれ。晴るる夜の星かてふ八文字を初めに据ゑたるはさらに心えがたし。晴れたる星空と闇の漁火と、ともに同じく夜半よはのけしきなるはさることなれども、明き空と暗き闇とけはひいたく異りて、はるかに眺めやるだにも、みまがふことありとはさらに思はれず。されば、星か螢か漁火か、をち方に見ゆる光はいづれなりやといぶかしむが一首の意こころなるべけれども、げにさもありけむとはえ思ひがたく、なにとやらむおぼつかなきところのこりて、まことしからず聞えではあるべからず。伊勢物語に載りて世に知られぬこの歌、在五中將の詠めりしに疑ひあるまじけれども、かの朝臣の詠草にはにげなきところあり。いささか手筒なりと云はでやはあらむ。

新古今集夏の部に入りたる攝政太政大臣藤原良經の詠めりし

いさり火の昔の光ほの見え

あしやの里に飛ぶ螢かな

てふ一首、業平朝臣の晴るる世の歌を本歌にとれるいにまぎれなし。今あしやの里に飛ぶ螢を見るにつけて、かつて在五中將の見たりけむ漁火のおのづから偲ばれてなほほの見ゆ

る心ちぞするといへるが一首のおもむきなるべし。この歌晴れたる星空のことはたえて云はず、ただ螢火の漁火のみをたぐへたればいともなだらかなり。業平朝臣の歌を本歌としつつその本歌の意を本歌よりもなほ巧みに述べたりと云ふをうべし。

(令和五年九月二十五日受附)